

# 英語における冠詞の意味特性と 名詞句の統語特性の関係について

増 富 和 浩

1. はじめに
2. 名詞句における冠詞の位置と解明すべき問題の所在
  - 2.1. 名詞句の統語構造と冠詞の位置
  - 2.2. 定冠詞および不定冠詞が文法性に関わる経験的事実
  - 2.3. 名詞句の定性とフェーズとの関係
3. 冠詞の語彙概念構造について
4. 冠詞の語彙概念構造と統語構造との関係
5. 指示詞を含む名詞句の文法性と LCS との関係
6. まとめ

## 1. はじめに

英文法において、冠詞の持つ指示性に関わる特性は、定と不定の2つに大別される。この点に関し、定冠詞 the と不定冠詞 a(n) の解釈がその指示性において異なるという事実は、統語構造が意味解釈を決定するという生成文法理論での一般的な仮定に基づけば、それぞれの冠詞が統語構造上に占める位置が異なるという帰結を予測する。しかし一方で、Abney (1987) 以降、生成文法理論においては、その解釈が定か不定かに関わらず、統語構造における冠詞の生起位置は限定詞句 (determiner phrase: DP) の主要部 D であるという分析が一般的である。本稿では、冠詞の統語構造上の位置と指示性の解釈の間に生じるこれらの矛盾を説明する方法について議論する。議論の過程では、主に以下の2点について考察する。

- (1) a. 冠詞の統語構造上の生起位置は定冠詞と不定冠詞では異なるか。  
b. あるいは、冠詞の持つ指示性は統語構造とは独立に決定されるのか。

次節以降で具体的に議論するが、英語においては名詞句の解釈が定であるか不定であるかという点その名詞句を含む文全体の文法性を左右する場合がある。近年の生成文法理論において導入されたフェーズ理論 (Chomsky (2000, 2001, 2008) など) の下では、名詞句が定の解釈を持つ場合、

その名詞句はフェーズとして機能すると仮定することで、これらの文法性が説明されるとする分析がある（大庭（1999）など）。このように、名詞句の解釈が定であるか不定であるかという違いが、英語表現の文法性に大きく影響を与えているという分析がある一方で、名詞句が定であるか不定であるかという解釈上の違いは、統語部門での派生過程においてどのように扱われるべきかという点はまだ十分に解明されているとは言えない。本稿の目的は、これらの点を明らかにすることで、経験的・理論的側面から文法理論の全体像の解明に寄与することである。

本稿では、定名詞句と不定名詞句の対比が文法性に関わる言語現象を指摘した研究（Bolinger（1977）、Fiengo and Higginbotham（1981）、Grimshaw（1990）、大庭（1999）、大庭（2003）など）を経験的な基盤として、冠詞の生起位置に関しては Abney（1987）の DP 分析を踏まえ、冠詞を伴う名詞句の派生過程の分析については Chomsky（2000, 2001, 2008）、大庭（1999）などの提案を再考し、冠詞の意味表示の分析方法については影山・由本（1997）などが提案している語彙概念構造（lexical conceptual structure: LCS）のモデルを参考として、以下の議論を進めることにする。

## 2. 名詞句における冠詞の位置と解明すべき問題の所在

### 2.1. 名詞句の統語構造と冠詞の位置

生成文法理論において、冠詞の機能を統語的に分析する近年の研究は、Abney（1987）に始まる DP 分析に依拠しているところが多い。DP 分析では、冠詞は決定詞句（determiner phrase: DP）内において、X バー理論で言うところの主要部に生起すると分析されている。従って、the および a(n) は、定・不定の区別に関わらず統語構造上は下記（2a）に示すように、同じ位置に生起すると考えられている。（2a）が示しているのは、冠詞は名詞句（noun phrase: NP）と結合（以下では、「併合」という用語を用いる）されて統語派生上の単位である構成素を形成し、その構成素全体の特性が DP と表示されるということである。この時、構成素全体の表示を決定する要素 D（（2a）では a(n) あるいは the）がその構成素の主要部であるとされる。

(2) a. [DP [D' [D a(n)/the] NP]]

b. [DP that/his [D' [D Ø] NP]]

ここで、それぞれの言語表現の持つ意味解釈が、その統語構造の違いにより説明されるとする生成文法の枠組みで考えると、1つの疑問が生じる。つまり、a dog と the dog のような単純な言語表現を比較してみても、両者の解釈は指示性を持つかどうかという点で明らかな違いがあるにもかかわらず、同じ統語構造を持つと分析されるからである。一方で、the と同様に指示性を示す指示代名詞や人称代名詞の所有格などの場合は、(2b) のように分析されており、統語構造上の位置は冠詞とは異なると分析されている。このとき、that や his が生起している位置は指定部と呼ばれ、主要部に一定の制限を加える働きをもつ要素が生じる位置であると考えられている。なお、(2b) の構造において Ø で示される要素は音形を持たないが、統語上の機能を果たす要素を示しており、

生成文法における一般的な表記の1つである。(2b)の構造は、[<sub>0</sub>∅]の表記により、発音はされないがDPの主要部として働く要素があることを表している。

従って、(2a, b)のような構造を想定した分析では、定冠詞と不定冠詞が持つ指示性に関する定・不定の違いを反映することはできないという問題を生じ、(1a, b)に関して言えば、(1b)が示しているように、冠詞の持つ指示性の違いは統語構造から直接的に説明することはできず、別の観点で論じられる必要があることになる。1つの可能性として、冠詞の持つ指示性を従来は動詞の意味概念を表示する手段として開発されてきた「語彙概念構造(LCS)」等の意味表示の手段により定義し、冠詞の指示性の有無は、LCSにおいて「指示性」という概念がどのように表示されるかという点に還元できるかもしれない。なお、そのような場合、冠詞のLCSと統語構造との関係はGrimshaw(1990)やLevin and Rapaport(1995)等が提案しているような一種の写像規則により論じられると考えられる。

以上の点を踏まえ、以下の議論では、英語の冠詞の指示性と統語特性の関係を冠詞を含めた指示詞のLCSのモデルを提案することにより、理論的・経験的な観点から分析することにする。

## 2.2. 定冠詞および不定冠詞が文法性に関わる経験的事実

本稿では、上記(1a, b)の課題に取り組むことで、従来記述的に説明されることが多かった定・不定冠詞の統語特性について新たな知見を提案する。具体的には、従来、生成文法の枠組みにおいて繰り返し論じられてきた(3)や(4)の例が示すような名詞句に関わる文法現象に対して、先行研究での不十分な点を補い、新たな説明を提案する。(なお、下記の例で、「\*」はその例が非文法的であることを示す。)

- (3) a. Who did you see a picture of?  
b. \*Who did you see the picture of?

- (4) a. There is a book on the table.  
b. \*There is the book on the table.

(3a, b)の対比は、他動詞の目的語の名詞句内部の一部の要素を答えとする疑問文をつくる場合の文法性の違いを示しているが、この場合、定名詞句の一部の要素を疑問詞として文頭に置くことは許されないという経験的な一般化がなされてきた。一方、(4a, b)に示される文法的な対比は、there構文においては定名詞句が生起できないことを示しているが、この事実は、there構文は会話に新たな名詞句を導入するために用いられる構文であるため不定名詞句が使用されると説明されてきた(Bolinger(1977)などを参照)。Fiengo and Higginbotham(1981)等は、名詞句の「定性」あるいは「特定性」という観点から、これらの経験的事実に対する定式化を試みているが、名詞句の持つそれらの意味特性が統語部門での派生過程にどのような影響力を持つのかという点は具体的には議論していないため、依然として記述的な説明の域を出ていないと考えられる。<sup>1)</sup>

本稿では、ここ数年の生成文法理論の進展、特にフェーズ理論の考え方を踏まえた上で、冠詞の統語構造上の位置を再検討するとともに、従来は動詞の意味特性を表示する目的で提案されてきた「語彙概念構造 (lexical conceptual structure : LCS)」(影山・由本 (1997) などを参照) を参考として、冠詞の意味概念を表示する方法を開発し、定冠詞と不定冠詞の指示性を明示的に比較することで、(3) や (4) に示されるような経験的事実を理論的に説明する手段を提案する。

### 2.3. 名詞句の定性とフェーズとの関係

すでに示した (3a, b) のような経験的事実に対して、大庭 (1999) は、生成文法におけるフェーズ理論の観点からの説明を試みている。大庭の分析によれば、(5a) に示すように、名詞句 (DP) はフェーズを形成し、その名詞句が定名詞句であるなど「特定性 (specificity)」を持つ場合、(5b) により P 素性 (P-feature) が付与されない。結果として、そのような名詞句の内部から疑問詞等を移動させることは、フェーズ ((6) の定義では HP がフェーズである) の内部から要素を移動することを禁じるフェーズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition: PIC) の違反を生じ非文法的となる (PIC の詳細については、Chomsky (2001) 等を参照)。なお、ここで用いられている P 素性とは、節や句の内部の要素を外部へ移動することを可能とするための素性である (この点に関する詳細は、Chomsky (2000: 108) や大庭 (1999) を参照のこと)。従って、(7) のような派生が排除されることは、フェーズ理論の枠組みの中では、PIC という制約を仮定することで説明される。

(5) a. DP は phase である。

b. D が [specific] という素性を持つ場合、P 素性が付与されない。(大庭 (1999: 31))

(6) Phase Impenetrability Condition (PIC):

The domain of H is not accessible to operations outside HP; only H and its edge are accessible to such operations. (Here the edge is the residue outside H', either specifiers (Specs) or elements adjoined to HP.) (Chomsky (2001: 13))

(7) a. \*Who did you see the picture of?

b. \*Who did you see [DP-Phase the [NP picture of  $t_{who}$ ]]?

↑ \_\_\_\_\_ ] PIC 違反

しかし、このような分析では、(5) が示しているように、名詞句がフェーズであるかどうか、また、P 素性が付与されるかどうかに関する定義が記述的であるため、なぜ特定性をもつ名詞句であればフェーズであるのか、そして、なぜその場合に限り P 素性が付与されないのかという点について、さらに理論的な考察が必要と考えられる。

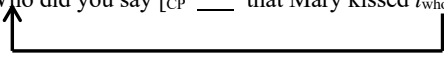
この点に関して、増富 (2015a, b) は DP がフェーズとなるか否かについて統語構造の点から考察している。特に、増富 (2015b) は、Lue (2015) が指摘しているドイツ語やノルウェー語の名詞

句の統語分析の成果を踏まえて、定名詞句の構造が<sup>3</sup>(8a) のようであると分析している。(8a) の統語構造においては、ADJ は、発音されないが、先行文脈中の名詞句を指す「前方照応的」な意味内容を持つ形容詞 (adjective) のことを示しているが、それが the と併合されて句を形成し、DP の指定部に生起している。

(8) a. [DP [the-ADJ] D [NP table]] (the の用法が前方照応の場合)<sup>2)</sup>

b. [DP [D a] [NP table]] (不定名詞句の場合)

ここで、生成文法の枠組みでの節構造の分析においては、従来、(9a, b) のような例に含まれる従属節 (以下では生成文法における用語に従って、CP (補文標識句 (Complementizer Phrase)) と略記する) から要素を取り出して疑問文を派生する場合の文法性について興味深い分析がなされてきた。(9a, b) を比較した場合、下線を付した CP の指定部に要素が生起しない (9a) の場合は文法的であるが、疑問詞 who が存在する (9b) の場合は非文法的となる。このような経験的事実に対しては、フェーズ理論の下では、CP、vP や DP のようなフェーズを形成し得る機能範疇の指定部に要素を伴う場合はフェーズが形成され、フェーズの内部と外部との統語派生上のアクセスが禁じられるためであると説明されている。つまり、この場合に PIC の違反を生じると言い換えることが可能である。

(9) a. Who did you say [CP \_\_\_\_ that Mary kissed *t*<sub>who</sub>]?  


b. \*What do you wonder [CP-Phase who bought *t*<sub>what</sub>]? (中村 et al. (2001))

 PIC 違反

節構造に対するこのような分析と同様に考えると、大庭 (1999) が指摘しているように、DP もフェーズになり得ると考えられ、(7a) の派生を示した (10) においても DP の指定部に the と音形を持たない形容詞から成る句があるので、DP がフェーズとなり、その内部の要素が文頭の位置に移動することは、フェーズ内外のアクセスを禁じる PIC により排除され、全体の派生が破綻すると説明することが可能である。同時に、大庭 (1999) においては記述的であった DP がフェーズとなる場合の定義についても、その指定部に要素が生起するかどうかという点から、CP や vP の場合を含めて、統語構造の観点から統一的に説明されることになる。

(10) \*Who did you see [DP-Phase [the-ADJ] D [NP picture of *t*<sub>who</sub>]]?

 PIC 違反

また、この考え方は、(4a, b) で示したような例にも応用可能である。(11) の対比は、英語の there 構文には、定名詞句が生起できないことを示している。従来は、there 構文には「定性制約

(definiteness restriction)」が課せられるため、the や that などが導く名詞句が生起することはできないと記述的な分析がなされてきた (Milsark (1974)、池内 (1985) などを参照)。ここで再び、(8) の名詞句の構造に基づいて考えると、(11a, b) の構造は (12a, b) となり、(12a) の不定名詞句では指定部に要素がないので DP はフェーズとならないが、定名詞句の構造を示した (12b) では、指定部に the と音形のない形容詞から成る句が生起しているため、DP がフェーズとなることにより、この後の派生が適正に進まず、非文法的となるという説明が可能であると考えられる。なお、(12b) の派生の詳細については、5 節で議論することにする。

(11) a. There was a table in the garden.

b. \*There was the table in the garden.

(12) a. There was [DP a [NP table in the garden]]

b. There was [DP-Phase [the-ADJ] D [NP table in the garden]]

以上のように、定名詞句あるいは不定名詞句を含む文の文法性の問題は、フェーズ理論の観点から、増富 (2015a, b) などの分析により、一定の説明がなされている。ただし、それらの分析で、重要な役割を果たしている音形を持たない形容詞 ADJ を仮定する理論的根拠については、検討の余地が残ると考えられる。次節では、語彙意味論の観点から、この問題を再度考察することにする。

### 3. 冠詞の語彙概念構造について

語彙意味論の研究では、動詞の意味を分析するために、「語彙概念構造」(Lexical Conceptual Structure: LCS) あるいは単に「概念構造」と呼ばれる意味表示が用いられる。これは、生成文法理論の発展の過程で、1970年代の生成意味論に端を発し、その後、改良を加えられながら展開されてきた意味理論の手法の1つである。LCSは各単語の持つ概念的意味を明示的に表示し、言語の意味的性質を明らかにしようとするものである。表示方法の詳細については研究者により異なる提案がなされている場合があるが、本稿では、主に影山・由本 (1997) の表示方法に従うことにする。影山・由本が指摘するように、意味論において動詞の意味を分析する場合、それぞれの動詞の意味を個々ばらばらに分析するのではなく、「状態」、「活動」、「変化」といった基本となる意味概念を基準としていくつかの意味グループが存在することを前提とした分析がなされるのが一般的である。

例えば、be動詞などの状態動詞がもつ「状態」という概念は、影山・由本 (1997) の表示方法に従うと、次のようなLCSを用いて表示される。

(13) [STATE [ ]<sub>y</sub> BE AT-[ ]<sub>z</sub>]

状態動詞の LCS として (13) のような雛形を想定した場合、BE や AT といった大文字で示された部分があるが、これらは「状態 (性)」や「位置」などといった基本的な意味の概念を表しており、意味述語あるいは意味関数と呼ばれている。また、y や z といった空欄の部分は変項を表しており、具体的な文の意味を考える場合には、それぞれの動詞が取る主語や目的語 (あるいは補語) などの項に対応する部分を示している。これらの変項と、それらが実際の統語構造中に現れる位置との対応関係は、Levin and Rappaport (1995) などにおいては、LCS から統語構造への一種の写像規則 (Levin and Rapaport の用語では *linking rule*) により説明されている。LCS と実際の文との関係を具体化するために、Sue is home や Sue is healthy など为例として考えてみると、(14a-d) のように考えることができる。影山・由本の説明に従えば、(14b) や (14d) の変項部分には Sue や home のような具体的な単語が表示されているが、厳密に言えば、各語彙の意味概念を表示する手段として用いられる LCS には直接項となる名詞 (句) が代入されるわけではない。(13) においては、統語構造との対応関係を分かりやすくするために主語や補語などの要素を便宜上示してあることに注意する必要がある。

(14) a. Sue is home.

b. [STATE [Sue] BE AT-[Place home]]

c. Sue is healthy.

d. [STATE [Sue] BE AT-[State healthy]]

また、(15) に示すのは、状態変化動詞 *die* の LCS であるが、(14) との違いは、AT に続く変項の位置が DEAD (あるいは NOT ALIVE) という特定の意味概念で占められていることである。このように、LCS の変項の位置に指定された特定の意味概念は定項 (*constant*) と呼ばれる。多くの動詞には、それが属する意味グループを表示する LCS の変項の位置にそれぞれ特定の意味概念が定項として指定されている。

(15) *die*: [BECOME [ ]<sub>y</sub> BE AT-[DEAD]]

次節では、これらの語彙の意味概念を表示する方法が、本稿で議論している冠詞の持つ「定性」の概念を分析する方法として利用できないかという点に注目して分析を進めることにする。

#### 4. 冠詞の語彙概念構造と統語構造との関係

本節では、上述の議論を踏まえて、冠詞をはじめとする指示詞が持つ意味の概念を語彙概念構造 (LCS) によって表示する方法について議論することにする。<sup>3)</sup> 具体的には、前節の状態動詞などの

LCS の表示方法を参考にして、冠詞や指示代名詞などの LCS の雛形が次のようであると考えるところにする。

(16) [<sub>DETERMINER</sub> ([Adjective]<sub>y</sub>) DEF ([Noun]<sub>z</sub>)] (指示詞の LCS)

指示詞の LCS として仮定した (16) においては、状態動詞の場合の BE に相当する意味概念が、指示詞の持つ「定性」(definiteness : DEF) という意味述語で表示されている。一方、変項 y と変項 z の位置には形容詞 (Adjective) と名詞 (Noun) が定項として生じているが、これらの定項は、状態動詞の LCS の場合 (の主語や補語) と同様に、具体的な決定詞句における指定部要素と補部要素 (例えば [<sub>DP</sub> that D book] の場合は、それぞれ that と book) に対応していると考えることができる。<sup>4)</sup> なお、前述の状態動詞の場合とは異なり、2つの定項に ( ) 表記が用いられているのは、これらの定項の生起が随意的であることを示すためであるが、詳細については以下で論じることにする。

また、動詞の LCS の場合と同様に考えると、個々の指示詞の LCS には (16) の雛形における変項 y の位置に特定の意味概念を表す定項を指定することができる。具体的には、定冠詞、不定冠詞、あるいは this や that といった指示代名詞の LCS は次のように表示できると考えられる。

- (17) a. a: [<sub>DETERMINER</sub> INDEF [Noun]<sub>z</sub>]  
b. the: [<sub>DETERMINER</sub> [FOREGOING]<sub>y</sub> DEF [Noun]<sub>z</sub>]  
c. this: [<sub>DETERMINER</sub> [THIS]<sub>y</sub> DEF [Noun]<sub>z</sub>]  
d. that: [<sub>DETERMINER</sub> [THAT]<sub>y</sub> DEF [Noun]<sub>z</sub>]

(17b) は定冠詞の LCS で、DEF という意味概念で「定」を表示している。また、FOREGOING (「前述の」) という概念によって定項 y の位置が占められており、このことにより、the の前方照応の用法が説明されることが考えられる。一方、不定冠詞の意味概念の中には、指示性は表示されないため、定項 y は表示されない。このように、各要素の随意性は、(16) の指示詞の LCS の雛形においては、生成文法の枠組みで一般的に用いられる括弧付き表示で示されている。結果として、指示性を持たない「不定」という意味の概念は、INDEF で表示されている。また、直示的な解釈を持つ指示代名詞 this や that の場合は、変項 y の位置に「直示性 (deixis)」という意味概念を表す特定の定項を指定することも考えられるが、本稿では説明を簡潔にするために、this や that の直示性を THIS あるいは THAT で代表しておくことにする。

(17a-d) の LCS と具体的な統語構造との関係を見ておくと、(18) のようであると考えられる。(18a, c, e, g) は個々の統語構造を、(18b, d, f, h) はそれらに対応する LCS を示している。これらの LCS の各項と、それぞれの統語構造の各項の対応関係は、上述の Levin and Rappaport (1995) 等の分析に基づけば、(19) のような写像規則によって説明されることが考えられる。



- (18) a. [DP [D a] [NP book]]  
 b. [DETERMINER INDEF [Noun book]<sub>z</sub>]  
 c. [DP ADJ [D the] [NP book]]  
 d. [DETERMINER [FOREGOING]<sub>y</sub> DEF [Noun book]<sub>z</sub>]  
 e. [DP this [D Ø] [NP book]]  
 f. [DETERMINER [THIS]<sub>y</sub> DEF [Noun book]<sub>z</sub>]  
 g. [DP that [D Ø] [NP book]]  
 h. [DETERMINER [THAT]<sub>y</sub> DEF [Noun book]<sub>z</sub>]

(19) 指示詞の LCS から統語構造への写像規則：

- a. LCS の外項は統語構造において DP の主要部 D の外項に写像される。  
 b. LCS の内項は統語構造において DP の主要部 D の内項に写像される。

このように説明すると、(16) の LCS は単に定冠詞、不定冠詞、this および that によって導かれる名詞句の解釈を記述的に表示しているだけに思われるかもしれない。しかし、(17) のような語彙概念構造 (LCS) が示しているのは各語の意味表示であるので、(15) の die の LCS などと同様に、語彙項目ごとに個別の意味表示がレキシコン (lexicon) において指定されていると考えることは自然なことであると考えられる。<sup>5)</sup>

ここで、指示詞の LCS の雛形を (16) のように仮定することの妥当性について考えてみることにする。(16) においては、「指示性」を表示する定項 y の生起は、すでに述べたように随意的であるので、(17a, b) とは対照的に、以下のような LCS の可能性がある。

- (20) a. a: [DETERMINER [SPECIFIC]<sub>y</sub> INDEF [Noun]<sub>z</sub>]  
 b. the: [DETERMINER DEF [Noun]<sub>z</sub>]

(20a) では、定項 y に「特定性」という意味概念が SPECIFIC で表示され、その結果、指示性を持ち、(20b) では定項 y が表示されていないので、この場合の the には前方照応の機能はないと考えられる。このような LCS に対応する具体例は、以下のような経験的事実により確認される。

- (21) a. A: “I bought a car yesterday.” (特定のな解釈の不定名詞句)  
 B: “What kind of car did you buy?”  
 b. A: “What’s wrong with Bill?”  
 B: “Oh, the woman he went out with last night was nasty to him.” (後方照応の定名詞句)<sup>6)</sup>

(21a) の談話では、発話者 A には自分が購入した車を認知できるが、発話者 B には認知できていない。従って、a car は特定のな解釈である。(21b) では、発話者 A と B はともに Bill については

十分な知識を共有しており、その Bill との関連・連想（と関係節に含まれる情報と）によって、the woman … に対応する指示物が同定されることになる（池内（1985: 53））。

ちなみに、不定名詞句の解釈が不定ではなく、特定のな場合があることを議論する必要性は、次のような there 構文の文法性からも確認することができる。すでに言及したように、there 構文には指示性を持つ名詞句は生起することができないが、(22b) が示すように some に導かれる不定名詞句であっても there 構文に生起できない場合が観察されている。このような事実に基づけば、不定冠詞の LCS に (17a) と (20a) の 2 つを区別して表示できるという点で、本稿の提案は妥当性があると考えられる。

(22) a. There are some caws in the yard.


b. \*There are the/some of the caws in the yard. (Shields (2008: 7))

以上の点を踏まえて、次節では、本稿が提案する分析に対して、他にも妥当性を示すことができるという点を具体的な経験的事実を用いて考察することにする。

## 5. 指示詞を含む名詞句の文法性と LCS との関係

前節で、指示詞の LCS を定式化したが、本節では、この提案の妥当性について指示詞を含む名詞句の文法性の点からさらに検証することにする。すでに確認したように、増富（2015b）は (23) の文法性は DP の指定部に the と音形のない形容詞 ADJ から成る句が生起しており、節構造との並行性の点から、DP がフェーズとなるので、定名詞句 the picture of who の中から who を文頭に移動させることは PIC に違反し非文法的であると分析している。しかし、このような分析に関しては、音形のない形容詞を想定する根拠についてさらに説明する必要があると考えられる。

(23) \*Who did you see [<sub>DP-Phase</sub> the-ADJ] D [<sub>NP picture of t<sub>who</sub>]]? (= (10))</sub>



本稿が提案している指示詞の LCS の分析では、ADJ を仮定する根拠は、(24) に示すように、不定冠詞の LCS では the の前方照応の機能に関わる意味概念が定項 y の位置に想定され、それが写像規則により統語構造と関連付けられるので、DP の指定部に LCS での FOREGOING という概念を反映する形容詞 (ADJ) を仮定することは無理がないと考えられる。ただし、実際の言語表現ではそのような形容詞は具現化されないという点から、概念としては存在するが、音形はない（発音されない）と考えることになる。従って、本稿の分析は、増富（2015b）の定名詞句の文法性の分析に理論的な根拠を提供し、事実と矛盾しないという点で妥当性があると考えられる。<sup>7)</sup>

- (24) a. [DP ADJ [D the] [NP book]]  
 b. [DETERMINER [FOREGOING]<sub>y</sub> DEF [Noun book]<sub>z</sub>]

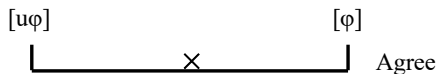
また、次のような there 構文の文法性に関する分析にも本稿の LCS からの知見が有効である。増富 (2015a) の分析に基づけば、(25a, b) の派生構造はそれぞれ (26a, b) である。

- (25) a. There was a table in the garden.  
 b. \*There was the table in the garden.

- (26) a. [TP there [T+be] [VP ~~t~~<sub>be</sub> [DP [D a] [NP table] in the garden]]]



- b. [TP there [T+be] [VP ~~t~~<sub>be</sub> [DP [the-ADJ] D [NP table] in the garden]]]



(25) の文法性は、従来、定性制約 (definiteness restriction) という記述的な制約で説明されてきたが、増富 (2015a) では、be 動詞と意味上の主語 ((25) では table) との「数」に関わる一致操作 (Agree) の成立メカニズムの観点から理論的な説明を試みている。(26a) では be 動詞と table の間で数に関する φ 素性 ([φ]) に関して Agree が成立し、be 動詞の解釈不可能な φ 素性 ([u φ]) が削除された結果 be 動詞が was として具現化され派生が収束する。一方、(26b) では DP の指定部に [the-ADJ] が生起しているため、DP はフェーズとして機能し、フェーズの外部から be 動詞が table にアクセスすることは PIC の違反となり、be 動詞と table の間の Agree が成立せず (結果として、be 動詞の形態が決定できないため) 非文法的であると説明している。

この場合においても、(26b) の構造には、(26a) には生起していない音形のない ADJ が、なぜ DP 指定部に生起できるのかという点を説明する必要がある。ここでも、(24) に示されるように、本稿が提案する指示詞の LCS と統語構造との対応関係により、DP 指定部の ADJ の生起は自然に説明することができ、増富 (2015a) の分析に理論的な根拠を与えることができる。なお、(22b) に示した特定のな解釈を持つ不定名詞句が there 構文に生起できないという事実も同様に説明することが可能と考えられる。(20a) で議論した特定のな解釈を持つ場合の指示詞の LCS においては、定項 y が SPECIFIC という概念で表示されるとすると、その場合の統語構造は (27c) のようであり、これまでの説明と同様に、DP がフェーズとして機能することで、PIC により be 動詞と table の間の Agree が阻止され、非文法的な派生であると説明できる。



## 注

- 1) これに関わる制約は、「特定性条件」や「定性制約」等の名称で呼ばれている（詳細については、Fiengo and Higginbotham (1981) 等を参照）。
- 2) 増富 (2015b) では、定冠詞 *the* が後方照応の機能を果たすときの定名詞句の構造は、 $[_{DP} [_D \text{the}] [_{NP} \text{table}]]$  となると分析している。関連した議論として、本稿の4節も参照のこと。
- 3) 指示詞とは冠詞、指示代名詞や人称代名詞の所有格など名詞の前に生起して名詞に一定の指示性を付与する要素のことである（池内 (1985) などの分類を参照のこと）
- 4) この場合の *that* は指示形容詞と考えられる。
- 5) レキシコンは「心的辞書」あるいは「脳内辞書」と呼ばれている。
- 6) (21b) との比較のために示せば、以下の例では関係節が *the woman* を同定する情報を提供していないので、先行する文脈中に指示対象となる不定表現がないと不自然である。

A: "What's wrong with Bill?"

B: "Oh, the woman who was from the south was nasty to him." (池内 (1985: 53))

- 7) 増富 (2015b) では、*the* の生起位置は ADJ と句を成し DP の指定部であるが、本稿の分析では *the* は、DP の主要部 D に生起すると考えている。この点に関しては、紙面の都合上、本稿では議論せず今後の課題としたい。ただし、本稿の分析を採用し、*the* の生起位置が DP の主要部であると考えことは、生成文法における従来の分析と矛盾せず、不定冠詞の生起位置を含めて、英語の冠詞の生起位置を統一的に説明できるという点には言及しておきたい。

## 参考文献

- Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman: London.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Fiengo, Robert and James Higginbotham (1981) "Opacity in NP," *Linguistic Analysis* 7, 395-421.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 池内正幸 (1985) 『名詞句の限定表現』, 大修館書店, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』, 研究社出版, 東京.
- Leu, Thomas (2015) *The Architecture of Determiners*, Oxford University Press, New York.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 増富和浩 (2015a) 「英語の存在文の文法性と定性制約について一定名詞句の統語構造からの再考」『英語と文学、教

- 育の視座』, 渋谷和郎, 野村忠央, 土居峻(編), 290-301, DTP 出版, 東京.
- 増富和浩 (2015b) 「英語における名詞句の指示性とその内部構造について—the + 固有名詞の文法性の観点からの再考—」『論叢』(宮城学院女子大学人文社会科学研究所紀要) 第 25 号, 19-32.
- Milsark, Gary (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- 中村捷・金子義明・菊池朗 (2001) 『生成文法の新展開』, 研究社出版, 東京.
- 大庭幸男 (1999) 「Phase としての名詞句表現」『言語研究の潮流—山本和之教授退官記念論文集—』, 稲田俊明他 (編), 21-36, 開拓社, 東京.
- 大庭幸男 (2003) 「特定性効果とフェイズ不可侵条件」『市河賞 36 年の軌跡』言語教育研究所(編), 202-210, 開拓社, 東京.
- Shields, Rebecca (2008) “What’s so special about D-linking?” Poster Session Presented at *NELS 39*, New York, NY: Cornell University.

# On the Relation between the Semantic Properties of Articles and the Syntactic Properties of Noun Phrases in English

MASUTOMI Kazuhiro

In this paper, I examine the syntactic structures of the noun phrases with the definite article *the*, the indefinite article *a/an*, or a demonstrative pronoun such as *this* and *that*, focusing on their semantic properties. In addition, I am going to discuss the grammaticality of such noun phrases from the perspective of the lexical conceptual structure (LCS) which is proposed within the framework of Lexical Semantics. In the course of the discussion, we mainly consider the following points:

a. Where does the definite article *the* or the indefinite article *a/an* occur in the syntactic structures?

b. Is it possible to establish the validity of “DP analysis” proposed by Abney (1987), which proposes that the syntactic position of the articles should be the head of DP (determiner phrase) ?

c. Is it possible to represent the conceptual meanings of definite and indefinite articles by using the LCS?

d. Based on such an LCS, is it possible to explain the grammaticality of English noun phrases with definite and indefinite articles which has been analyzed by “definiteness condition” or “specificity condition” (see Milsark (1974), Fiengo and Higginbotham (1981) and so on) ?

In order to explore these issues, I also focus on the framework of the phase theory, which is proposed by Chomsky (2000, 2001, 2008) among others under the Minimalist Program.

As a result of the discussion here, I will show where the structural positions of demonstratives are and that the DP structures with them play an important role in predicting the grammaticality of definite and indefinite noun phrases. Such an analysis should have some implication for the syntactic theory of noun phrases or DP structure.

